

暗い旅

倉橋由美子

暗い旅

倉橋由美子

東都書房版

暗 い 旅 ¥ 300

昭和36年10月15日發行

著 者 くら 橋 由 美 子

發行者 西 村 俊 成

印刷所 豐國印刷株式會社

製本所 橫田製本株式會社

發行所 東 都 書 房

東京都文京區音羽町3ノ19

電話・大塚 (941) 大代表 3111

振替・東京 7 2 7 3 2

© 1961 Yumiko Kurahashi Printed in Japan

あ作	Ⅲ	Ⅱ	I	目 次
な者				
たか				
にら				
248	183	89	5	

裝
幀
麻
生
三
郎

暗
い
旅

I

光明寺行きのバスがでるまで、十五分以上も待たなければならない、急いでゐるわけではないが、あなたはいらいらしながらバス乗り場をはなれて驛前廣場を横切る。右側に西武百貨店、左側にあなたとかれがよくバヴァロアやエクレアを食べたことのある風月堂、そして観光都市らしく土産物を並べた店……あなたにとってはまったく見慣れた鎌倉の驛前だ、しかしいま鎌倉は二月の埃つぽい寒氣のなかであなたによそよそしい顔をみせてゐる、まるで、目的のない旅行者、いかがはしい、空虚な眼をした異邦人でも迎へるやうに。

なんのためにあなたは眞冬の鎌倉までやつてきたのか……今日は週のまんなかの日だ、十時からB教授の《Variété V》があつたのに、あなたは出席しなかつた。あてもなしに東京驛にでた、大丸、丸善とめぐり歩いてまた東京驛へ……あなたの選擇は二つしかなかつたのだ、中央線の電車で吉祥寺のアパートに歸るか、それとも横須賀線で鎌倉にむかふか。東京驛、終着驛で

あり始發驛である東京驛は、あなたを旅へと誘惑した、いや、あなたにはこのよく晴れた眞晝にガラスとコンクリートの明るい獨房へと歸つていく勇氣をもたなかつたのだ。あなたは横須賀線の電車に乗った。だがなぜ鎌倉へ？ あなたはだれにもその理由を説明することができない、あなたの目的をうちあけることもできない……目的があきらかにされたとしても、冬の鎌倉と冷たく毛ばだつた海は、その目的にふさはしいものではない、とひとはいふだらう……ダイヤモンド・チェックの外套に包まれた不定形の原生動物のやうなあなたが横濱まで運ばれてきたとき、にこやかな車掌がやつてきてあなたの偽足にさはつた。定期券をみせて、「鎌倉まで」とあなたはいつた、それであなたの形はきまつた……鎌倉驛のホームに降りたとき、一時まへだつた。

若宮大路をくだつてきた小型タクシー、赤煉瓦色のニュー・コロナをとめる。材木座のはうへ、とあなたはいふ。

「材木座のどの邊です？」

「海のみえるところまで」

「海岸橋のあたりでいいですか？」

「そこから左へはいつてください」

あなたはすこし芝居がかつてゐる、だれもタクシーに乗つてそんないひかたはしないだらう。あなたは、いま自分が悲劇の主演女優めいた憂悶の顔で、その舞臺、冬の風にざわめく海にむか

つて歩みでいかうとしてゐることを知つてゐる……

あなたがかれといふことばでその意味と重みをたえずかんじてきた存在、あなたの婚約者、あなたの愛であるかれを、あなたは探さなければならぬ……かれはすでに一週間以上もあなたのもとに不在だ、かれは存在しない、失踪してしまつた……あなたは探さなければならぬのだ。すでに徒勞の數日がすぎたにもかかはらず、あなたは諦めることができない、次第に鹽辛く濃縮され石よりも硬い絶望をかかへながら、それが死に變態するのを期待しながら、いつそうむなく歩きまはらずにはゐられない、街角から地下の喫茶店へ、そして銀杏の並木道から砂濱まで。それは過去のなかへ迷ひこんでいかうとするやうなものだ。鎌倉……あなたにとつて過去の街であり廢都である鎌倉……かつてかれとともに生きた海と太陽、その愛の遺跡を求めてあなたはやつてきた、だがこの廢都のなかで、失踪したかれをみいだすことができるのか、もしもかれがいつさいの終結にむかつて身を投げたのだとしたら……もしさうなら、ここにあなたがみいだすのはまたもや不在、オゾンのやうな匂ひをもつた無、そしてもうひとつの失望にすぎないだらう。鎌倉があなたの曖昧な訪問を冷淡に迎へてゐるのもその前兆だ……あなたの家族やかれの家族がここに住んでゐるといふことも、あなたの搜索に大した光明をもたらしはしない。あなたはかれが自分の家に歸つてゐる可能性をほとんど信じない、あなたにとつてもかれにとつても、家は歸還すべき巢ではなくつねに脱出すべき檻だつたから。

車は海岸通りを走つてゐる、やがて九品寺の横にでるだらう。この邊で右折しませうかと運轉手がたづねる、海底電信中繼所の横にでる道らしい。ここでいいわとあなたはひひ、百圓硬貨を運轉手にわたす。「海ならすぐですよ、ほらみえてゐるでせう」……ほんたうだ、海はあなたのまへにある、意外に狭くて低い海の斷片が。あなたの口に失望の苦い汁があふれる、あれは海ではない……いや、海の全貌を所有するためにはもつと近づかなければならぬだらう……あなた足をはやめ、砂濱におりる、わざと海をみないで、その腕に抱きとられるまでは戀人の顔をみまいとする少女のやうに。あなたは幅の狭い砂濱を横切り海に近づく……

荒れはてた眞冬の海水浴場だ、散亂する竹や木片、死人の足首のやうな靴、褐色の瓶。砂濱を吹きぬける鹽辛い風と波の音があなたに襲ひかかる。海はあなたを裏切つた……あの神話的な輝きを帯びた海はもうどこにもない、あなたがたがそのなかで火の色をした二匹の魚のやうに泳ぎまはつた海、エメラルド色の庭園に似たあの海は……

おもひきつて搜索願をだすべきではないだらうか？ いまあなたは不安の毒にからだのなかを溶かされながらこの考へを噛みしめてゐる……いや、すでに數日まへからあなたはそれをガムのやうに噛みつぶけてきた、もうなんの味もなくなつてゐるが、吐き捨てることもできないで、

あなたはその考へをもてあましてゐるのだ……

かれの搜索願をだす……すると、警察が、あの黒い制服に身をかためた組織が、巨大な節足動物のやうにその脚を動かしはじめる。かれの発見は時間の問題だらう、だがあなたはかれが死體として発見されることを望んではゐない。発見、警察からの通知——おそらくこの謎めいた失踪の結末は新聞でもごく簡単に報ぜられるだらう——そしてかれの両親とともに、あなたも、あなたの両親も、警察に出頭することになる、虫に喰ひあらされた神像のやうなかれ、あなたの婚約者であるかれを確認するために。あなたは顔を堅くしてそれらのことをやつてのけなければならぬだらう……あなたはぞつとする。

うちあげられた海藻の死骸が、波うちぎはにちらばつてゐる、一列に並び、ときに波の舌でそのぬるぬるした葉をなめられながら……エプロンをした中年の女がそれらを拾つてゐる、どうするつもりだらう、食用に供するつもりかもしれない……濃緑の、傷だらけのわかめ、ひきちぎられたほんだはら、裂けた舌のやうな紅藻……あなたはそのひとつをつまみあげて匂ひを嗅ぐ。あなたの好きな海の匂ひがする、かつてあなたがその口のなか、舌の裏に、鼻にかんじたあの匂ひだ、七年まへの夏に……

……ところで、いまして自重したほうがよいかもしれない、まだなにごとくも決定的ではないのだから。かれの失踪、かれの自殺、それはまだあなただけが自覺してゐる幻の癌細胞にすぎない、あなたはそれをどんなふうに證明することができるだらう？ そんなものを警察官の想像力のなかに移植する試みは、困難であるといふ以上にばかげたことではないか？ 係官は反問するだらう、あなたはどういふわけでそれを失踪とみなすのか？ かれの親戚や友だちのところはひととほりあたつてみたか？ あなたはかれと婚約してゐる、それにもかかはらず、あなたはかれの行方についても、自殺の理由についても、まったくおもひあたることはないといふ、いや、さういひながらあなたはかれの死について妙に確信をもつてゐる……どうしてなのか？ まつたく奇妙ではないか、ほんとはあなたとかれとのあひだには、なにか異常にもつれた關係があつたのだらう？ 説明できない？ なぜできない、ほんとになにかあつたのだらう、たとへば、あなたかかれか、どちらかに新しい戀人ができてしまつたとか……さうだ、かれにはあなた以外に秘密の女友だちが——つまり特別に親密な女友だちがゐたのではないか？ それともあなたのほうに？ いつたい、あなたとかれとは結婚する意志をもつてゐたのか？ 愛しあつてゐたのか？ 愛しあつてゐたが *aimer* することを停止した關係……それはどういふことだ、あなたがたはそれではどういふ關係になるのだ？ わからない、あなたがたの氣もちはまるでわからない、わかることは、なにか醜惡な匂ひがするといふことだけだ……するとあなたは、いらだつた、否定的な身ぶりとともに黙りこんでしまふだらう、けつして理解させることはできないとい

ふ絶望的な怒りさへかんじながら。あなたにはわかつてゐる、あなたが警察署を訪ただけで、そしてあの頬骨と猜疑心の發達した、官僚的で、想像力に乏しく、鶏のやうに忙しげに動きまはつてゐる係官とむかひあつただけで、あなたはきつと、なにごともしひたがらない頑固な容疑者のやうに、敵意にみちて口をとぎし、舌をこはばらせてしまふだらう……

すでにかれがその死を完成してゐるとしたら、あるひはまだ生きてはゐるが未知の場所で死の穴にすべりこむ準備を着實にすすめてゐるとしたら、どんな周到な警察力によつてもかれをひきもどすことはできないだらう、だから、とあなたは考へる、いまとなつて搜索願をだすことにどれほどの意味があるといふのか？ なんの意味もあるまい。搜索は死んだかれの發見、かれの死の確認に終るだらう、それはひとびとが死者を正式にこの世界から除籍するために必要な手續のひとつではあるが、あなたはそんな手續に参加することに耐へられないだらう。

けつして終ることのない波の音。海邊に住むと、最初はかなり長いあひだ海の單調な騒音に慣れることができないものだ、あなたも七年まへの四月に鎌倉に住みはじめたとき、さうだつた、この音は三角形にひらいたあなたのなかの河口におしよせる海嘯のざわめきに似てゐるからだ……いま、海はあなたの足もとで濁つた波をたてて砂にはひあがらうとし、薄い舌をひろげて砂をなめてはまた遠ざかる。二月の午後の風、微細な砂粒をふくんでざらざらする風が吹きつけ

てあなたの表面を乾かし、冷やしていく。すこし寒くなつたやうだ、頬や手足が冷えてきた………しかしあなたのなかにある病んだ太陽に似た球狀のほてりのために、あなたは熱っぽい。疲れてゐる證據だ、疲勞が蓄積されてくるといつもそんなふうになる………

14

ああ、失踪してしまつてからのかれは、なんといふ執拗さであなたを苦しめたことだらう………あなたの眼と耳と鼻はかれの存在のどんな陰微な開示にも敏感だつた、街を歩きまはると、いたるところにかれが立つてゐた、蒼ざめたかれの存在が、記憶の豎棺にいれられて………かつてかれと會つた場所——かれと歩いた舗道、夕暮どき人目をかすめてすばやい接吻をかはした木屋のかげ、銀杏の實がおちてつよく匂つてゐた大講堂の横、地下の喫茶店、ときどきかれを待たせた驛………あなたはそれらの場所を歩きまはつた、いまもそこに棲みついてゐるやうにおもはれるあなたがたの愛の怨靈におびえながら………

さうだ、これは驚くべきことだがまつたく確かなことだ、この數年のあひだ、あなたがたが二十四時以上會はなかつたことはただの一度もなかつた………それだけでも、今日で一週間以上になるかれの行方不明、連絡の杜絶はあなたには信じがたいやうな事實だ、だからこの事實はいつまでたつてもあなたにとつては括弧つきの事實でしかないのだ。